

社会科歴史分野における歴史事象の認識の変容を促すことを目指した単元開発と効果の検証：  
小学校社会科における『鎖国』史観を対象として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, 宇海, 石上, 靖芳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025373">https://doi.org/10.14945/00025373</a>

# 社会科歴史分野における歴史事象の認識の変容を 促すことを目指した単元開発と効果の検証

—小学校社会科における『鎖国』史観を対象として—

Development of a course unit to promote modification of knowledge of a historical phenomenon in  
social studies and verification of the effect

—Historical view on “national isolation” in elementary school social studies —

戸田 宇海\* ・ 石上 靖芳\*\*

Takami TODA, Yasuyoshi ISHIGAMI

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

## 要約

本研究の目的は、小学校歴史分野における『鎖国』という事象の取り扱いについて、その意味を問い直し、深く再考させることで『鎖国』への認識を変容させることにある。その目的を達成するために、「松前」「対馬」「薩摩」「出島」という4つの外交上の窓口を詳細に調べ、議論することを通して再考させるという単元を開発し実践をおこなった。その結果、『鎖国』について、＜幕府の支配体制＞＜外交＞という2つの視点に沿った深い議論が展開され、認識が再構成されていることが確認された。

キーワード：鎖国 社会科歴史分野 認識の変容 単元開発

## 1 問題の所在と研究目的

小学校6年生の社会科の教科書には、『鎖国』は「幕府は、貿易相手を、キリスト教を広める恐れのないオランダと中国に限った」「外国の情報や貿易の利益を幕府が独占した」と記載されている。また、「『鎖国』のもとでもいくつかの地域では他の国や地域との交流が行われていた」とも記載されている。さらに、現行の小学校学習指導要領によれば、「『鎖国』について調べるとは、例えば、キリスト教の禁止や海外との貿易の統制などが行われたことを取り上げて調べ、江戸幕府による政治が安定したことが分かるようにすることである」とされ、『鎖国』は江戸幕府の行った主要な政策として、必ず学習する内容となっている。

一方で、2017年2月に文部科学省より発表された次期学習指導要領の改定案では、『鎖国』は「歴史研究が進み、当時の状況を正確に言い当てた表現でなくなった」とされ、「江戸幕府の対外政策」と表記の変更が検討されることとなった。以上の経緯から、『鎖国』に対する考え方が、かつての捉え方とは変わってきている現状がある。

その背景として、それまでの『鎖国』というものの捉え方に異を唱える研究者が増えてきた

---

\* 静岡大学大学院実践高度化専攻

\*\* 教職大学院系列

ことが挙げられる。ロナルド・トビ（2008）は、「近世の日本は『鎖国』的状况どころか、江戸時代を通して、東アジア諸国と密接につながり、日本の外交政策は東アジアの域内経済や日本の国内政治経済にとって、きわめて重要な役割を果たし続けた」と述べている。また、荒野（2012）は、「近世の日本が「四つの口」という限られた「場」を通してではあれ、周辺の地域を通して地球的世界とゆるやかにつながりながら発展を維持して近代を迎えた」と述べている。以上から、『鎖国』というものに対して、新たな見解が議論され始めてきている。

以上の先行研究を踏まえて、小学校歴史教育における『鎖国』という事象を取り上げ、『鎖国』について、その意味を問い直し、深く再考させることで『鎖国』への認識を変容させる授業を構築する必要があると考えた。

まず、現在の小学校6年生が使用している教科書の記述がどのようになっているかを調査した。対象とした教科書は、東京書籍「新編 新しい社会科」と、教育出版「小学社会6上」の2種類である。東京書籍「新編 新しい社会科」では、小単元「江戸幕府と政治の安定」（5時間扱い）において、「キリスト教の禁止と鎖国」という見出しで1時間、「大国とわたりあった琉球王国」という見出しで1時間、3頁にわたって扱っている。教育出版「小学社会6上」では、小単元「幕府の政治と人々の暮らし」（5時間扱い）において、「鎖国への道」という見出しで1時間、「鎖国のもとでの交流」という見出しで1時間、4頁にわたって扱っている。教科書でも、『鎖国』が成立してきた歴史的経緯を学びつつ、『鎖国』は必ずしも国を閉ざしたわけではないという観点で扱われている。

さらに実態を明らかにするために、小学校6年生が『鎖国』をどのように解釈しているか、ある小学校で6年生の児童に対し、『鎖国』について記述式で調査を行った。その結果、56人中46人が「国を閉ざした」「出島以外での貿易を禁止し、幕府が貿易を独占した」「オランダと中国以外の国と貿易をしなかった」などと回答した。調査対象の児童は、約1ヶ月前に江戸時代の学習を終えており、学習内容はある程度記憶していると本実践に入る前には考えられた。つまり、社会科の授業で学んだ内容が、前述の児童の回答のような内容にきわめて近かったのではないかと考えられた。

教科書では、前述のとおり、「『鎖国』は必ずしも国を閉ざしたわけではない」という内容が書かれていたが、児童の実態は「国を閉ざした」というイメージが強いという結果から、『鎖国』のもつイメージが、かつてのものから変わらないでいる現状があるのではないかと考えられた。また、教師のもつ「鎖国観」が影響を与えている可能性もうかがえた。多くの教師が歴史の授業で受けてきたと考えられる内容、「『鎖国』とは「すべてが閉ざされた状況」で「キリスト教の禁止」と「出島における幕府の独占的な貿易」である」ということが教師の中でも認識され続けた結果、教材解釈が不足して教授されているのではないかと推察された。

以上のことから、本研究では、小学校歴史教育における『鎖国』という事象の取り扱いについて、その意味を問い直し、深く再考させる授業を構築し、『鎖国』への認識を変えていく単元を構成することで、児童が『鎖国』の意味を、再構成する過程を明らかにすることを目的とする。

## 2 研究方法

### 2-1 単元開発の概要

研究方法は『鎖国』史観を捉えなおすという視点から、アクションリサーチ（以下ARと省

略)という研究方法を採用した。また、AR実施に関しては、筆者の在籍校であるA市立B小学校の6年生の1クラスを対象とした。教科書は、教育出版「小学社会6上」を使用し、全7時間の単元を開発して授業実践を行った。分析対象データとして、第6時、第7時におけるビデオ撮影および、発話記録を収集した。

## 2-2 アクション・リサーチの概要

開発した社会科単元と授業実践の概要は、下記(1)～(7)に示したとおりである。

(1) 期間 平成28年10月12日(水)～平成28年11月9日(水)

(2) 授業者 T教諭(筆者)

(3) 科目 社会科

(4) 学級 A市立B小学校 6年C組

(5) 単元名 『鎖国』ってなんだろう～幕府の本当のねらいは何?～

※教育出版「小学社会6上」:「幕府の政治と人々の暮らし」からの差し込み授業

(6) 目標

「幕府が行った『鎖国』の実態を「四つの口」で行われた交易について調べることを通して、『鎖国』とは何だったのかを再度考え、幕府が『鎖国』を行った本当の理由(東アジアとの積極的な外交政策を行い、幕府の国内支配の強化を意図した)について考えを持つことができる。」

(7) 単元計画及び構想図

B小学校は、学区に「朝鮮通信使」と関わりの深い寺院や史跡等があり、児童にとっても身近な内容なのではないかと考え、表1のように単元を構成した。

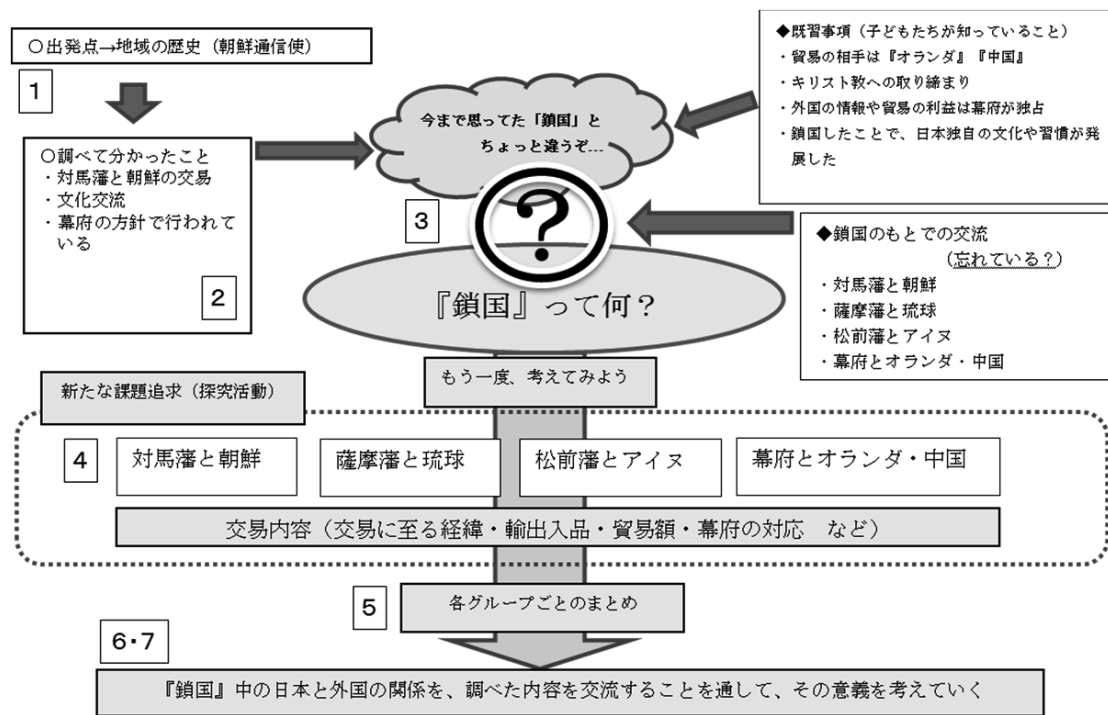
単元の構成は、第1次では、「朝鮮通信使」を導入とし、児童が知っていることや体験したことを出発点とすることで、学習の動機づけを図った。そして「朝鮮通信使」について学習したり調べたりすることで、『鎖国』が行われていた江戸時代になぜ「朝鮮通信使」が来ていたのかという疑問を児童が持つことを想定し、その疑問をもとに『鎖国』ってなんだろう」という学習課題を設定した。

表1 鎖国を再考する社会科単元計画

次	時	目標	学習活動	単元構想図とのつながり
第1次	1	朝鮮通信使について、知っていることを発表したり、資料から読み取って考えたりしている。(思・判・表→発言内容・ワークシート)	・江戸時代を通して行われた「朝鮮通信使」と地域とのつながりや史跡について知る。 ・朝鮮通信使の再現行列に参加した経験のある子どもたちの経験や、身近な情報を出し合い「朝鮮通信使」についての理解や考えを深める。	1
	2	朝鮮通信使についてPC等を活用して調べ、なぜ日本に来たのかを知り、調べた結果をノートにまとめている。(技→活動の様子・ワークシート)	・「朝鮮通信使」について、PCや学習室の資料などを活用して調べ、ワークシートにまとめる。 ・情報の活用の仕方、多角的な見方について指導し、複数の信頼できるHPを事前に提示、活用するようにする。	2
第2次	3	「鎖国」という幕府の方針を再確認するとともに、例外として4つの貿易が行われていたことがわかっている。(知・理→ワークシート)	・前時に調べた「朝鮮通信使」について話し合い、『鎖国』しているにも関わらず、外国との交易をしていることに気づかせる。更に、江戸時代には「4つの口」で交易がおこなわれていたことも知る。	3
	4・5	各自のテーマ(薩摩・対馬・松前・出島)について調べ、PCや資料などから、それぞれの交易について、交易の内容や貿易額などの特徴について読み取っている。(技→ワークシート)	・『鎖国』に対するこれまでの押さえを確認するとともに、幕府の考えと実際の政策にずれがあることに注目させ、その理由を追求することで『鎖国』はただ国際的に孤立したわけではないことに気づかせていく。	4 5
第3次	6・7	調べてきたテーマを基に、日本と近隣諸国との関係を発表し、話し合う活動を通して、「鎖国」という政策を見直し、幕府の意図や国際社会との関係を考えることができる。(思・判・表→ワークシート・活動の様子)	・前時までにとまとめた資料と基にグループごと発表する。その後、各グループの発表をもとに、「4つの口」で行われていた交易から考えられる『鎖国』の本当のねらいについてグループでの話し合い、さらに学級での話し合いへと広げていく。	6・7

第2次では、第1次で作った学習課題に迫るため、「四つの口」である「出島」「対馬」「薩摩」「松前」で行われていた交易の内容について探究する活動を設定した。学級を、探究したい「口」ごとに、4人から6人の班に分け、「松前班」「対馬班」「薩摩班」「出島班」として設定した。それぞれの歴史的な背景や交易の実態などを、書籍やインターネット、学校に保管されている郷土資料などを活用して調べさせていった。

第3次では、お互いが調べた情報を総合して、『鎖国』とは本当に「国を閉ざした」「幕府による貿易の独占」なのかを再度検証する議論の場面を設定した。『鎖国』の内容を検証する中で、「幕府が『鎖国』をしたねらいは何だったのか」を考えることで、『鎖国』への認識を深化させることを意図して設定した。表1は第1次から第3次までの単元構想であり、図1は具体的な単元構想図である。



※[1]～[6・7]は時数を表している

図1 鎖国を再考する社会科単元構想図

### 2-3 データの収集及び分析方法

収集したデータは、開発した単元の、児童たちのポートフォリオ及び第7時の討論の発話記録である。今回の分析に関しては、第7時の各グループ活動における討論の発話を分析対象とした。第7時は、単元の最後の時間であり、それまで調べてきた内容を交流する場面であったため、総合的に判断して『鎖国』を問い直す場面として一番効果的な学習が行われると考えられたためである。グループ活動の場面は、児童が3名から6名のグループで行われた。内容は「『四つの口』について調べた内容を総合して、幕府が『鎖国』を行った本当の理由を考える」ことである。グループは6グループで実践された。発話の記録方法は、S大学教職大学院の大学院生9名により、6グループの発話各12分をICレコーダーで記録した。そして全データを

文字に起こした発話記録をもとに、それぞれのグループの学びの内容及び過程を分析した。

各グループの発話の中から4つのグループと全体協議の発話について全て文字化し、発話の内容に応じて、『鎖国』を深めるための解釈の視点に関して議論されている概念が抽出された。発話の『鎖国』を深めるための解釈の視点に関する概念の抽出においては、表2にあるように、発話の内容を意味によって解釈し、概念として確定していった。例えば、3のBによる発言「この絵を見て鎖国の狙いは・・・えっと、日本の立場をあげたかったと思います」は、「日本の立場を（貿易相手国より）あげる」という内容から、【日本の置かれた状況】という概念として確定した。また、4のCによる発言「キリスト教は広めたくなかったんだけど、貿易により利益はほしかった・・・から、鎖国だけだったと思う」は、発言の中で複数の概念があると判断できたため、「キリスト教を広めたくなかった」から【キリスト教の禁止】、「貿易により利益はほしかった」から【貿易の利益】という2つの概念として確定していった。そして、各グループの中でどのような議論が行われ、認識の変容や深化があったかを検証した。

表2 松前班の発話例（抜粋）

話し手	発話者	発話	概念
1	A	だから話す？	
2	A	誰から話す？じゃあ、Bから。	
3	B	えっと、たぶん、この絵を見て鎖国の狙いは、・・・えっと、日本の立場をあげたかったと思います。	【日本の置かれた状況】
4	C	と、おれが考えたことだと、えっと、キリスト教を広めたくなかったんだけど、貿易により利益はほしかった・・・から、鎖国だけだったと思う。	【キリスト教の禁止】 【貿易の利益】
5	A	Dは？	
6	D	ん・・・まあ同じような感じで、立場だったら上に・・・なんだろう・・・日本の位をあげたかった。	【諸外国に対する日本の立場の状況】
7	A	Eは？	
8	E	みんなと同じで、日本を、の、をあの、他の国と、上に・・・日本を上にしたかったから。	【諸外国に対する日本の立場の向上】
9	A	えっとさ・・・ぼくは、独占権をあげたくらいだから、あの、たぶんだけど、あの、みんな国を、日本は他の国より強いんだぞみたいな、そのためにあのオランダとかの身分を下げて、あの・・・日本を高い立場にさせて、今貿易をしていない国にも・・・あの、一番強いんだから、君も従うなら・・・みたいなそんなことをしたかったんじゃないのかな・・・。	【貿易の利益】 【諸外国に対する日本の立場の向上】
10	C	でもさ、あのみんながさ、自分たちの地位をあげたいっていったんならさ、えっとさ・・・鎖国をしないで、他の国との戦争をして強いことを見せつけばよかったですねじゃないの？	【諸外国に対する日本の立場の向上】

### 3 結果と考察

#### 3-1 『鎖国』を深めるための解釈の視点

4つのグループの発話分析を行った結果、『鎖国』を深く解釈するための視点として、【鎖国に至る歴史的背景】【鎖国が続いた理由】【幕府の支配】【内政における幕府の立場の向上】【幕府の利益】【貿易の利益】【キリスト教の禁止】【日本の置かれた状況】【諸外国に対する日本の立場の向上】【交易相手国との関係】の10の概念が抽出された。さらにそれらを分類し、主として、幕府が国内における支配体制の強化や確立のために『鎖国』をしたという内容に関するものである【鎖国に至る歴史的背景】【鎖国が続いた理由】【幕府の支配】【内政における幕府の立場の向上】【幕府の利益】【貿易の利益】【キリスト教の禁止】の7つの概念を<幕府の支配体制>というカテゴリとして位置付けた。次に、主として日本を取り巻く国際社会の関係や日本の立場などに関する内容である【日本の置かれた状況】【諸外国に対する日本の立場の向上】【交易相手国との関係】の3つの概念を<外交>というカテゴリとして位置付けた。概念やカテゴリをまとめたのが表3である。

表3 鎖国を解釈するためのカテゴリ・概念リスト一覧

カテゴリ	概念	定義	発話具体例
へ幕府の支配体制	【鎖国に至る歴史的背景】	鎖国に至るまでの、日本と諸外国との関係や、鎖国に至った内容について議論しているもの。	・キリスト教を広める人たちは日本より上にいるからその人たちに頭を下げるのが嫌だから、接触を避けて鎖国してみたいな。
	【鎖国が続いた理由】	鎖国がなぜ続いたのかについて議論しているもの	・じゃあなんで、江戸時代の終わりまで鎖国をしていたの？ ・まあ、力が足らなかったから・・・
	【幕府の支配】	幕府がどのように国内を支配したか、実効的な面で議論しているもの。	・琉球の人とかを利用してものとか利益を得た…あのあまり立場の低い松前とか、あの米の取れない松前とか、対馬とか…薩摩藩とか、あまり目立たない国をなんかちょっと喜ばせるため…
	【内政における幕府の立場の向上】	幕府が自分たちの立場を上げることで、内政面でどのような利益があったのかを議論しているもの。	・だってさ、自分をあげて大名たちを下げたわけだから、そんなに自分たちのパワーを広めて、国民たちに、もう君たちは逆らえませぬよみたいなの。
	【幕府の利益】	交易国から得た情報などにより、幕府が得をしているといった内容を議論しているもの。	・で、薩摩を利用して、琉球からえっと・・・利益を得て、対馬から朝鮮の利益を得て、幕府はもう全部さ・・・あの、藩を利用しているわけじゃん。
	【貿易の利益】	交易国から得た貿易による金銭的、物品的な利益について議論しているもの。	・イギリスとかは、もう国交を断絶しちゃって、でも一応、貿易とかの利益はほしかったんだと思う。
	【キリスト教の禁止】	キリスト教を禁止することについて議論しているもの。	・どっかキリスト教を広める恐れがなければ、まあいいみたいなの、さっき言ったよね？
へ外交	【日本の置かれた状況】	外交上、当時の国際社会における日本の置かれた状況について議論しているもの。	・だから、日本は支配したかったんじゃない？他の国を。 ・貿易ができる国だけとだけ貿易をしたのだと僕は考える。
	【諸外国に対する日本の立場の向上】	諸外国に対して、日本がどのような立場をとったかや、いかにして立場を向上させようとしていたのかを議論しているもの。	・幕府は初めから貿易をするにあたって他の国より上になって交易をしたかった。
	【交易相手国との関係】	交易を行っていた国との関係について議論しているもの。	・え、でもさあれじゃん？国書を出したってことは、国書を出したから朝鮮は納得したのかな。だとしたら何で目上になったのかな。

## 3-2 各グループにおける概念ごとの発話数

次に、表3で示した概念に関するグループの発話を「出島班」「松前班」「薩摩班」「対馬班」と、グループでの議論後に行った学級全体の議論について、数を確認してまとめたのが表4である。

各グループにおける抽出された概念数の平均は46.2、最大が63で最少が30であり、開きが見られた。中でも特徴として、松前班と対馬班が、＜幕府の支配体制＞＜外交＞というカテゴリー共に、ほぼ似通った数の概念の表出が見られた。一方で、「出島班」は、＜幕府の支配体制＞が9、＜外交＞が21という、やや＜幕府の支配体制＞より＜外交＞の方が多概念数で議論されていた。「薩摩班」では＜幕府の支配体制＞が32、＜外交＞が12というように、偏りが見られた。

そこで、概念の表出に偏りが無い「松前班」「対馬班」を取り上げ、どのような議論が展開されたかや、『鎖国』についてどのような認識の深化があったのかを検証することとした。

表4 各グループごとの鎖国を解釈するための概念の発話数

カテゴリ・概念名	グループ名				全体協議 クロストーク
	出島班	松前班	薩摩班	対馬班	
幕府の支配体制	9	33	32	22	13
幕府の支配	3	7	15	1	3
内政における幕府の立場の向上	0	4	7	0	5
幕府の利益	0	4	5	0	1
貿易の利益	6	3	3	2	1
キリスト教の禁止	0	13	2	7	2
鎖国に至る歴史的背景	0	0	0	12	1
鎖国が続いた理由	0	2	0	0	0
外交	21	30	12	26	6
日本の置かれた状況	0	15	0	0	0
諸外国に対する日本の立場の向上	9	7	5	19	5
交易相手国との関係	12	8	7	7	1
ラベル総数	30	63	44	48	19

### 3-3 対馬班の議論から見る認識の深化

表5は、対馬班の議論の展開である。この班はA男、B女、C男の3名で構成されていた。3名とも、対馬班を自分で選んで調べ学習を行った児童である。A男は発言力があり、社会科への興味、関心も高い児童である。B女は、社会科のみならず様々な教科の学習での定着の良い児童であり、思考力も優れている。C男は、どちらかというと言言する場面が少ない児童であり、さらにこの授業の前時は欠席だったため、発言するよりは聞き手に回る形になっていた。対馬班は以上のようなグループの構成であり、班での議論はA男とB女が中心となって進められていた。

対馬班は、カテゴリである〈幕府の支配体制〉と〈外交〉についてバランスよく議論がなされていた。表5にあるように、議論の展開は大きく「Ⅰ：表層的な議論の場面」、「Ⅱ：複数の情報から議論している場面」、「Ⅲ：議論が深化した場面」に分けることができた。Ⅰではそれまでの既習学習を基に〈外交〉についての表層的な議論が行われていたが、Ⅱで、「四つの口」についての情報をⅠの内容につなげて議論し、話題が〈外交〉から、内政における〈幕府の支配体制〉に転換している。そしてⅢでは、〈幕府の支配体制〉と〈外交〉の両面から、『鎖国』についての教科書の記述を批判的に考え、まとめている。詳細は以下に述べる。

Ⅰは「表層的な議論の場面」である。抽出された概念は、ほとんどが【諸外国に対する日本の立場の向上】であり、『鎖国』は〈外交〉に関する問題であり、目的も〈外交〉に関係するものだと、A男もB女もとらえていたと考えられる。ここでは、A男、B女ともに学習した内容から、日本は実際に交易していた国より立場が上であったことを下線部①で確認している。しかし、「キリスト教を広める国」＝「身分の高い国」という認識を持っているため、「頭を下げたくなかった」(下線部③)から『鎖国』をしたという浅いとらえ方をしている。A男も「日本は上で、目上で何だろう。」(下線部④)と、悩んでおり、この段階では、A男、B女ともに、「目上である」ことにどのような利点やねらいがあったかはわかっていない。

Ⅱは「複数の情報から議論している場面」である。抽出された概念は、前半は【交易相手国との関係】が主であったが、後半に【諸外国に対する日本の立場の向上】が主となり、【鎖国に至る歴史的背景】【幕府の支配】の視点からの議論が出されるようになった。このことから、〈外交〉について深く議論するうちに〈幕府の支配体制〉への視点が出されたと考えられる。



表5 対馬班の議論の展開

	番号	発言者	発言内容	概念
I 表層的な議論の場面	6	B女	①とりあえず、交易して日本の方が上になったってことは確実だよな？	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	7	A男	日本はプラスみたいな感じだよな	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	8	B女	だってさ交易してるやつたちが身分が低いってことは、②交易をしないキリスト教を広める人たちは日本より身分が高かったからやめたっていうのも考えられるんじゃない？	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	9	A男	高い？	
	10	B女	高い。日本がキリスト教を広める人たちに③頭を下げたくなかったから…その…そう…。うーん。なんだ？	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	11	A男	④日本は上で、目上で何だろう。わかんないよく。	
	12	B女	とりあえず日本は上にしたかった。上で良かった。	【諸外国に対する日本の立場の向上】
(中略)				
II 複数の情報から議論している場面	25	A男	⑤全部が目上だよな。松前も長崎だって	【交易相手国との関係】
	26	B女	⑥でも通信使の時は赤字になってないか？それどっちが赤字なのかな？	【交易相手国との関係】
	27	A男	⑦え、まってどっち赤字？	
	28	B女	日本じゃないはず。多分。	【交易相手国との関係】
	29	A男	⑧どっちにしる交易をするにあたって目上。	【交易相手国との関係】
	30	B女	どっちにしる上だよな。	【交易相手国との関係】
	31	A男	⑨だって対馬と朝鮮だって秀吉の時に戦いをしたのにまたわがままみたいな感じで。	【鎖国に至る歴史的背景】 【交易相手国との関係】
	32	B女	え、でもさあれじゃん？国書を出したってことは、国書を出したから朝鮮は納得したのかな。だとしたら何で目上になったのかな。もうわかんなくなってきた。	【交易相手国との関係】
	33	A男	⑩目上になれば仕切れて目上にならないと仕切れなくなっちゃう。	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	34	B女	だよな。じゃあ、自分が下の立場に立ちたくなかったから鎖国をした。だよな？	【諸外国に対する日本の立場の向上】
35	A男	下の立場だと仕切れないし、欲しいものとか言えなくなる。	【諸外国に対する日本の立場の向上】	
36	B女	とりあえず、⑪幕府はめっちゃ(国内を)無理やりまとめたかったってことだね、日本を	【幕府の支配】	
(中略)				
III 議論が深化した場面	60	A男	⑫本当は教科書に書いてあったことはキリスト教が言うことを聞かなくなることを恐れたからだけど、⑬目上になりつつ、キリスト教を広めないところと貿易みたいな。	【諸外国に対する日本の立場の向上】 【キリスト教の禁止】
	61	B女	多分さ、教科書のも⑭半分はあってると思うんだよな。	
	62	A男	付け足しみたいな感じ？	
	63	B女	そうそうそうそう。じゃあ、えっと…今のをまとめると、まず家康の時に目下だった鎖国してからも交易してる国プラス、目上のキリスト教を広めるので家光の時代まで続いて、それで家光の時代になったら、交易してる人たちと…	【鎖国に至る歴史的背景】
64	A男	する人たちに目上入って、言うこととか聞かせてから、それとキリスト教を広める恐れのない国と貿易して…	【諸外国に対する日本の立場の向上】 【キリスト教の禁止】	

※対馬班の議論の一部の抜粋

ここではA男が、漠然としていたIの議論部分の具体的な根拠として、前時までに学習した松前藩や長崎（出島）の話題を出した部分である（下線部⑤）。それに対し、B女は、朝鮮通信使には多くの費用を日本が出していた事実を述べている（下線部⑥）。その発言を受けてA男は困惑（下線部⑦）している。その後、「目上になる」ということが、金銭的な利益だけのことではなく、何らかの目的があることに気付き始めている（下線部⑧）と考えられる。次のA男の発言も、「だって対馬と朝鮮だって秀吉の時に戦いをしたのにまたわがままみたいな感じで。」（下線部⑨）と別の目的があるのではないかと思考を広げている。

その後、A男が「仕切る」という言葉を使い説明をしている（下線部⑩）。A男の鎖国に対する認識が、「国を閉ざす」という消極的なイメージから、「欲しいものを得る」「支配する（仕切る）」といった積極的な外交戦略のイメージに深化していった場面である。その発言に対し、B女は「幕府はめっちゃ無理やりまとめたかったってことだね、日本を。」（下線部⑪）と発言しており、『鎖国』は強固な幕府支配を行う政策の一つであったことに気付きはじめている。

Ⅲは、「議論が深化した場面」であり、まとめの段階の議論の部分である。抽出された概念は、【諸外国に対する日本の立場の向上】【キリスト教の禁止】【鎖国に至る歴史的背景】であり、2つのカテゴリである＜外交＞と＜幕府の支配体制＞がバランスよく出されてまとめの議論がなされている。A男の最初の発言（60）は、鎖国に対する認識が再構成されたことを表しており、発言の前半部分の「本当は教科書に書いてあったことはキリスト教が言うことを聞かなくなることを恐れたからだけだ」（下線部⑬）は、キリスト教禁止を目的とした「国を閉ざす」という消極的なイメージである。後半部分の「目上になりつつ、キリスト教を広めないところと貿易みたいな。」（下線部⑭）は、「欲しいものを得る」「支配する（仕切る）」といった積極的な外交戦略のイメージである。この発言を受けて、B女も「教科書のも半分はあってると思うんだよね。」（下線部⑮）と発言しており、教科書に書かれていた既習の知識が、この活動を通して再び認識されることを通して、より深化されていったと考えられる。

以上の内容をまとめると、表5にあるように、Iの議論の場面では、『鎖国』に関する既習事項であり、教科書でも押さえられている＜外交＞に関する概念が多く出されていたが、Ⅱで、自分たちで調べた「四つの口」の情報をつなげて考えることにより、＜幕府の支配体制＞についての意見が出されるようになってきた。その議論を続けていくうちに、教科書で学んだ『鎖国』の理由である「キリスト教の禁止」「幕府の貿易独占」という内容だけが『鎖国』の目的ではないということに気づいたのがⅢである。『鎖国』の目的は、単純な外交上の問題だけでなく、諸外国に対する日本の立場を上げることで、内政においても幕府の立場を向上させるという目的があったと認識が再構成されたと考えられる。

### 3-4 松前班の議論から見る認識の深化

表6は、松前班の議論の抜粋である。この班の議論は、A男とC男が中心となって進められていた。特に、C男の意見に対し、A男を中心とした班の児童が新たな視点や概念の意見を言うことで、徐々にC男の意見に広がりや深まりが見られるようになり、班全体の考えの深まりにもつながっていく場面が見られた。

松前班は、対馬班と同様、カテゴリである＜幕府の支配体制＞と＜外交＞に関する鎖国を解釈する視点の概念がバランスよく議論がなされていた。表6にあるように、議論の内容から「Ⅰ：前時までの考えを主張・強化する場面」「Ⅱ：議論を重ねることで新たな視点に気づいた

場面」の2つの議論の過程に分けることができた。Iでは、班による議論の直前に示された資料を基に【諸外国に対する日本の立場の向上】という視点と、各自の意見をつなげて考え、議論を始めた。この場面では＜外交＞に関する議論が中心に行われ、『鎖国』は諸外国に対する日本の立場の向上が主たる目的だという流れで議論が行われた。IIでは、「松前・対馬・薩摩に交易の権利を幕府が認めたことが、幕府の国内での地位を上げることにつながった」という意見が出されたのをきっかけに、＜幕府の支配体制＞に関する意見が多く出されるようになり、議論が深まっていった。この議論を通して、幕府が『鎖国』を行った目的は、「キリスト教の禁止」「貿易の独占」だけでなく、松前・対馬・薩摩などの藩に交易の独占権を「与える」ことで、それを利用して幕府の国内における地位を向上させ、支配体制を強化する狙いがあったのではないかという結論に達することができた。このような議論の中で、『鎖国』についての認識を深化させることができていた。

Iは「前時までの考えを主張・強化する場面」である。抽出された概念は、【諸外国に対する日本の立場の向上】【キリスト教の禁止】【貿易の利益】【鎖国が続いた理由】であり、ほぼ同数が抽出された。

前半は、班による議論の直前に示された資料から得た新しい視点を、各々自分の意見とつなげようとしている様子が見受けられる。この場面でC男は、鎖国の狙いを【キリスト教の禁止】と【貿易の利益】であると考えていた（下線部①②）。A男は資料から得た「諸外国への日本の立場の向上」という視点から、貿易の独占権を相手国に与えたことにより、日本の立場を向上させる効果があったのではないかという自らの解釈について発言している（下線部③）。しかし、自分の考えがゆるがないC男は、【諸外国に対する日本の立場の向上】をねらいとするならば、他に方法があったのではないかと切り返している（下線部④⑤⑦）。そのやりとりを繰り返す中で、C男は『鎖国』のねらいが、当初の自分の考え（下線部①②）で妥当であることを確認している。自分にはない新しい視点に対し、C男が自分なりの考えを発言したり、それに対する相手の返答を聞いたりする中で、自分の考えを深化（下線部⑧）させていったと考えられる。

IIは、「議論を重ねることで新たな視点に気づいた場面」であり、C男が「交易相手国」と「幕府」の関係について班で話し合うことを通して、内政上の幕府の立場が高められていることを把握した場面である。抽出された概念は【幕府の利益】【幕府の支配】【交易相手国との関係】【内政における幕府の立場の向上】【キリスト教の禁止】である。ここでは【幕府の利益】と【内政における幕府の立場の向上】の割合が高くなっていることから、議論をしてきたことで、【幕府の利益】と【内政における幕府の立場の向上】が『鎖国』の目的として重要であるということに気づいたと考えることができた。

下線部⑨では、前から主張している【貿易の利益】をC男が再度主張している。その後、A男の発言（下線部⑩⑪）を聞き、交易相手国との関係について着目していく。A男の発言（下線部⑫）を受けて、幕府の立場が松前藩より高く、松前藩は交易の独占権を幕府より「与えられていた」ことを確認した。松前だけでなく、「薩摩」「対馬」も松前藩と同じように幕府によって独占権を「与えられていた」とこと関連付けて考え、班での議論をまとめながら、下線部⑭にあるように、交易を許可した幕府と藩の関係が話され、それまで考えていた【貿易の利益】と結びつけて考えることができていた。C男が当初持っていた【キリスト教の禁止】と【貿易の利益】という考えに、【幕府の利益】や【内政における幕府の立場の向上】という視点が加わっ

表6 松前班における議論の展開

	番号	発言者	発言内容	概念
I 前時までの考えを主張・強化する場面	4	C男	と、おれが考えたことだと、えっと、①キリスト教を広めたく なかったんだけど、②貿易により利益はほしかった・から、 鎖国だけだったと思う。	【キリスト教の禁止】 【貿易の利益】
	(中略)			
	9	A男	えっとさ・・ぼくは、独占権をあげたぐらいだから、あの、た ぶんだけど、あの、みんな国を、③日本は他の国より強いんだ ぞみたいな、そのためにあのオランダとかの身分を下げて、あ の・・日本を高い立場にさせて、今貿易をしていない国に も・・あの、一番強いんだから、君も従うなら・・みたいなそ んなことをしたかったんじゃないのかな・・。	【諸外国に対する日本の立場の向上】 【貿易の利益】
	10	C男	でもさ、あのみんながさ、④自分たちの地位をあげたいって いったんならさ、えっとさ・・鎖国をしないで、他の国との戦 争をして強いことを見せつけられればよかったですねじゃない の？	【諸外国に対する日本の立場の向上】
	(中略)			
	23	A男	鎖国は一応・・・一時っていうかなんか、いったん鎖国し て・・。	
	24	C男	じゃあなんで、⑤江戸時代の終わりまで鎖国をしていたの？	【鎖国が続いた理由】
	(中略)			
	27	D男	まあ、⑥力が足らなかったから・・。	【鎖国が続いた理由】
	28	C男	いったんだったら、もっと・・だったら、もうすでにちよつと 力はたまっているはずだったから⑦その時点でもうえ鎖国をや めて、他の国とかの文化を学べばよかったですねじゃない？強く なるためには・・。	【諸外国に対する日本の立場の向上】
(中略)				
31	C男	⑧キリスト教から自分たちを守るためだけであって、貿易との 利益は得なかったから、キリスト教を広めないし約束したオラ ンダ・中国・朝鮮とかは、まあその辺とかは許して、キリスト 教を広める可能性のあるイギリスとかは、もう国交を断絶し ちゃって、でも一応あの・・・貿易とかの利益はほしかった んだと思う。	【貿易の利益】 【キリスト教の禁止】	
(中略)				
II 議論を重ねること で新たな視点に気づいた場面	54	C男	支配ではないけど、アイヌとかあの松前・・・あの琉球の人と かを利用してものとか利益を得た・・あのあまり立場の低い松 前とか、あの米の取れない松前とか、対馬とか・・薩摩藩と か、あまり目立たない国をなんかちよつと喜ばせるためで、喜 ばせて、あの・・⑨交易をいっぱいさせて・・その裏で幕 府は・・ん・・すごい・・儲かる	【貿易の利益】 【幕府の利益】 【幕府の支配】
	55	A男	儲かるっていうか力を、力を・・あの⑩幕府が力をためて、 あの、貿易をしてもいいけど、下の身分なんだよ、たぶん松前 とかは。	【幕府の利益】 【交易相手国との関係】
	56	C男	一番端っこだから・・	
	57	A男	下の身分だけど・・あの・・。貿易してもいいからいいけど、 ⑪幕府は自分を高めた、自分が一番上だと示して松前とかはあ の・・貿易ができるからうれしいわけじゃん？	【内政における幕府の立場の向上】
	58	C男	うん、米がとれないからね。	
	59	A男	でも⑫幕府は自分の力を高めたいから、その独占権を渡した だけであり・・。	【内政における幕府の立場の向上】
	60	C男	その⑬幕府は、松前とかを利用していったってわけでしょ？	【幕府の利益】
	61	A男	だから、キリスト教はまあ、日本人はあの・・身分が低い人 の方が断然的に多いわけじゃん。	【幕府の支配】
	62	A男	その人全員と、もしも、大名たちと將軍たちが戦ったとしたら さ、数的にさ、負けるわけじゃん？	【幕府の支配】
	63	C男	負ける	
	64	A男	だからさ、あの、バトルは避けるけど、あの・・まずバトルを 避けることにより、キリスト教を広めなくさせれば・・。	【幕府の支配】 【キリスト教の禁止】
(中略)				
70	C男	で、⑭薩摩を利用して、琉球からえっと・・利益を得て、対馬 から朝鮮の利益を得て、幕府はもう全部さ・・あの、藩を利 用しているわけじゃん。	【幕府の利益】	
71	A男	男だから、とにかく幕府が一番高いわけだから・・。	【内政における幕府の立場の向上】	

※松前班の議論の一部の抜粋

たと考えることができる。

このように、C男を中心とした班での議論が行われることで、C男以外の児童もそれぞれの『鎖国』に対する認識を深化させている。自分たちが調べた内容にはない視点や、児童それぞれの考え方を交流することで、それまでの認識に変化が見られた場面であった。

以上の内容をまとめると、Iでは、鎖国のねらいを【キリスト教の禁止】と【貿易の利益】であると捉えていた児童を中心に議論が行われた。幕府が貿易の独占権を相手国に与えたことで、幕府がその国よりも優位な立場に立つことができたため、『鎖国』の目的は【諸外国に対する日本の立場の向上】ではないかとする児童と、【諸外国に対する日本の立場の向上】が目的なら、別の手段でそれを行えばいいと考えていた児童との議論が進んでいった。IIでは、議論を重ねるうちに、内政上の幕府の立場が高められていることに児童が気付きはじめ、松前藩以外の薩摩藩や対馬藩の例を関連付けて考えることで、交易の許可を幕府が3つの藩に与えたことが【内政における幕府の立場の向上】につながることを把握することができ、それが『鎖国』をした幕府の目的として捉えることができたと考えられる。

#### 4 総合考察

本研究の目的は、小学校歴史教育における『鎖国』という事象を取り上げ、『鎖国』について、その意味を問い直し、深く再考させることで『鎖国』への認識を変容させる授業を構想し、『鎖国』への認識を変えていく単元を構成することで、児童が『鎖国』の意味を、再構成する過程を明らかにすることであった。

本単元を開発して実践した理由は、「『鎖国』の目的は「キリスト教の禁止」「幕府による貿易の独占」であり、江戸時代は国を閉ざしていた」と考える児童が多いという実態があり、近年の研究動向及び、「四つの口」に関する教科書の記述とのずれがあったからである。単元開発にあたっては、児童が「『鎖国』についてもう一度考えてみよう」と自然に考えることができるように、第1次から第3次までを設定した。

第1次では地域に残る「朝鮮通信使」を取り上げて調べ、学習の動機付けや課題設定を行った。これによって児童は「鎖国していたのになぜ外国の使節が来ていたのか」という疑問を持ち、「『鎖国』とは何だったのか」という課題を自然に持つことにつながった。その課題を受けて、第2次では、「四つの口」について、班ごと分担し、資料やインターネット等を活用して調べ、まとめていく活動を設定した。第2次でまとめた内容は、第3次で、それぞれの内容を発表することで共有し、それをもとに「『鎖国』とは何だったのか」という課題に対する子どもたちなりの答えを考えていった。

第7時では、単元のまとめとして、課題に対して探究してきた内容を学級全体で共有し、各班ごとに議論をする時間を設定した。

「対馬班」では、「四つの口」の情報をつなげて考えることにより、＜幕府の支配体制＞についての意見が出され、その議論を続けることで、教科書で学んだ『鎖国』の理由である「キリスト教の禁止」「幕府の貿易独占」という内容だけが『鎖国』の目的ではないということに気づき、『鎖国』の目的は、単純な外交上の問題だけでなく、諸外国に対する日本の立場を上げることで、内政においても幕府の立場を向上させるという目的があったと考えることができた。

「松前班」では、『鎖国』の目的は【諸外国に対する日本の立場の向上】ではないかと当初考えていたが、議論を重ねるうちに、内政上の幕府の立場が高められていることに気付き、松前

藩以外の薩摩藩や対馬藩の例を関連付けて考えることで、交易の許可を幕府が3つの藩に与えたことが【内政上における幕府の立場の向上】につながることを把握し、それが『鎖国』をした幕府の目的として捉えることができた。

この「対馬班」及び「松前班」は、授業を受ける前までの『鎖国』に対する認識が、授業を通して深化している。この2班は、鎖国に関して解釈を深めるための2つのカテゴリである<幕府の支配体制>と<外交>をもとに、多角的な視点からの議論がなされていた。また、各班の調べてきた内容をつなげて議論していることにより、より認識の深化が図られやすい状況にあったと考えられる。それ以外の「出島」「薩摩」を担当した班においても、鎖国に関して解釈を深めるための2つのカテゴリごとの発話の偏りはあったものの、各班の調べてきた内容をつなげた議論は見られた。

しかし、班によって深化の仕方には差があるという実態も見られた。その理由として、カテゴリごとの発話のバランスがとれていなかったことや、他の班が調べた内容をより有効につなげて議論できなかったこと、目的に沿って議論を展開していないことなどが挙げられる。また、資料や、自分たちが調べた内容に固執していると、そこから思考が発展しないということも挙げられる。これらは今後の課題として、授業の展開を修正していく必要があると考える。

## 5 おわりに

本研究を通して、『鎖国』に対する認識を深化させるための一方策を提案することができた。今後、更なる指導方法の検討を行うことで、より多くの児童に、より深い学びを引き起こすことができるようになると考えている。

最後に、本研究を行っての課題を述べておきたい。本研究は、単元の最後に位置付けた全体討議に、学んだことのすべてが集約されることを意図して発話を対象に歴史的事象を深めるための概念の抽出を行った。今後は、ポートフォリオやパフォーマンス課題などを設定し、総合的にこの単元で何が成立し、児童が何を学んだのかをより細かく整理し、検証し、明らかにする必要がある。

また、今回『鎖国』を扱った目的は、従来の鎖国観に対し、先行研究で明らかになってきた新しい事実を教材化したことで、それまでの認識を変容させ、再構成させることであった。このような問題は歴史上の他の時代にも見られることである。例として挙げれば、聖徳太子や鎌倉幕府の成立、明治維新の意味など、歴史研究の進展により、これまでの歴史事象に対する知識や考え方を転換する必要性が出てきている。そのためにも、今回のような単元開発を行い、実践することで、歴史の見方・考え方を考察していく授業を行う必要があると考える。『鎖国』だけでなく、その他の時代を扱う単元にもこの実践を転用し、歴史をどう批判的に見ていくか、歴史の見方・考え方を育てる単元開発、授業実践を行い、事例の蓄積を図っていく必要がある。

研究で明らかになった課題を改善し、今後の授業実践につなげていきたい。

## 謝辞

本研究を推進するにあたって、多大なる協力をいただいた、静岡大学教職大学院教育方法開発領域の臼井秀明教諭をはじめとする、教育方法開発領域の2年生の皆さんに、ここに記して感謝申し上げます。

### 参考文献

- ・土屋 武志 (1993) 「世界との関わりを重視した社会科歴史授業の開発：中学校歴史的分野の単元「鎖国」の場合」社会科研究 41 (0) pp79-88
- ・B・M・ボダルト＝ベイリー (1994) 『ケンペルと徳川綱吉:ドイツ人医師と将軍との交流』中央公論社
- ・永積洋子編 (1999) 『「鎖国」を見直す』山川出版社
- ・川勝平太編 (2000) 『「鎖国」を開く』同文館出版
- ・ロナルド・トビ (2008) 『「鎖国」という外交』小学館
- ・松方冬子 (2010) 『オランダ風説書「鎖国」日本に語られた世界』中央公論新社
- ・荒野泰典 (2012) 「「四つの口」と長崎貿易—近世日本の国際関係再考のために—」 (<http://www.nippon.com/ja/features/c00104/>) (2017.10.1確認)
- ・荒野泰典 (2015) 「近世の国際関係と「鎖国・開国」言説：19世紀のアジア と日本、何がどう変わったのか」お茶の水女子大学 比較日本学教育研究センター研究年報 Vol.11 pp.6-17

## Development of a course unit to promote modification of knowledge of a historical phenomenon in social studies and verification of the effect

—Historical view on “national isolation” in elementary school social studies —

Takami TODA, Yasuyoshi ISHIGAMI

### Abstract

This study aims to inquire and revise the meaning of the historical phenomenon “national isolation” in social studies and to modify students’ perception of it. To achieve the study aim, we examined four diplomatic windows in detail, namely, “Matsumae,” “Tsushima,” “Satsuma,” and “Dejima.” We developed and implemented a course unit that made students re-think “national isolation” through discussion. A keen discussion on “national isolation” along two viewpoints, “the Shogunal system” and “foreign diplomacy,” was conducted, and we confirmed that students restructured their knowledge of “national isolation” .

Keywords: national isolation ,history of social studies, development of a course unit, modification of knowledge